

大道理かわら版 むくろじ

発行元

大道理夢求の里交流館

運営協議会

TEL: 0834-88-1830

平成29年

11月15日号

(No.24)

口伝で受け継がれた踊りを次世代へ 手踊り保存会

大道理地区の新畑、横川地区で、約三百年前から伝えられてきた「手踊り」。伝承によると、始まりの経緯は、「当時、風水害が起こつたり、赤痢などの疫病が蔓延したりして、地区の方々は大変苦しみ、何とかしなければという思いで、三人の若者が、山口市大内に伝わる踊り（神舞）を習いに行き、河内神社で奉納したところ、翌年から災害が減って、地域が活性化した」とされています。これまで口伝で継承され、書物としての、当時の記録は残っていません。

秋積博さん著「大道理の昔」によれば、踊りを伝える古老達が次々と亡くなり、踊りが途絶える一歩手前の昭和五十九年、大道理をよくする会が、手踊り保存会を結成し、同年のふるさとまつりで披露した、と記されています。現在の手踊り保存会の活動としては、沼城小学校での総合的学習の一環として、それぞれの地域に伝わる踊りやまつりについて学ぶ授業で、井上正幸さん、兼俊勉さん、山本並子さんが、小学生に踊りを教えるに行き、次世代へ伝える活動をされています。今号のむくろじでは、手踊り保存会の皆さんに、これ



▲2017年。沼城小学校3年生の皆さんに、手踊り保存会の井上正幸さんと山本並子さんが手踊りを教えておられます

までの活動のことや、地域の伝統を守り、伝えていくことへの思いについて伺いました。また、かつて大道理地区の八朔祭りで奉納されていた手踊りの風景などに納されて来た、新畑、横川地区の方々から伺ったお話もお伝えします。

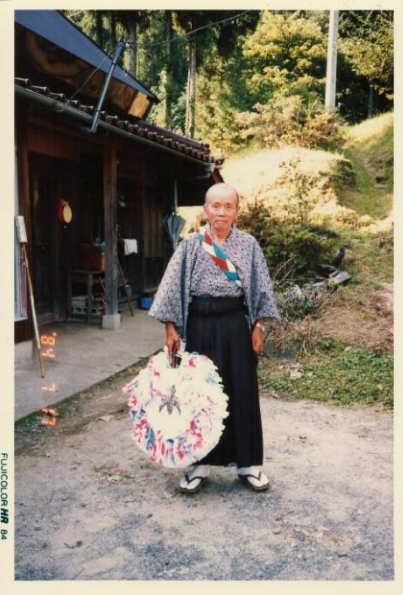
手踊り保存会の始まり

昭和五十九年、六月。故、山本定彦さんを会長として「大道理手踊り保存会」が発足しました。保存会で大切に保管されている資料には、各社新聞誌や旧徳山市の広報誌に掲載された、「二十五年ぶりに復活 大道理手踊り」という見出しの新聞記事の複写があり、当時の様子が伝わって来ま



▲広報とくやま昭和59年8月5日号掲載記事です

記事には、保存会の発足によって、昭和三十四年の八朔祭りでの奉納を最後に途絶えていた手踊りの復活し、同年七月二十一日開催の「市民ふれあいの集い」で二十五年ぶりに披露すること、木曜日の夕方、旧大道理公民館の講堂に集まって、皆で練習されたことなどが書かれています。



▲「手踊り保存会」で踊りの指導をされていた青竹勇さん（昭和59年当時 77歳）

大道理地区の世帯数と人口

世帯数	190世帯
人口	381人
男性	173人
女性	208人
高齢化率	55.4%

(平成29年10月31日現在)

青年団、手踊りを受け継ぐ

保存会発足の経緯について、手踊り保存会会長の井上正幸さんに伺ったところ、当時活発に活動されていた青年団の皆さんが、山本定彦さんを中心として、新畑、横川地区の古老の方たちから手踊りを習われたことがそもそもの始まりであることが分かりました。

井上正幸さん「五十年前の話で、忘れてしまふ部分もあるけど、定彦さんが、手踊りを奉納して来た新畑の人だということもあって、青年団で手踊りを残していこうということになりました。青年団で手踊りを習い始めた時期は、昭和三十七年くらいだったと思います。当時の山口県は、伝統芸能を残そうという動きが盛んで、県の伝統芸能大会が毎年か隔年開かれ、青年団は手踊りで出場していました。昭和四十三年、東京で開催された青年団の大会には「郷土芸能部門」で、徳山市連合青年団、大道理青年団が、山口県代表に選ばれ、手踊りを披露することになり、皆で東京へ行きました。踊りは、青竹勇さんから習いましたが、一踊る時には、後ろの足の腹が見えたらいけないのと、「足が高く上げたらいけない」など、丁寧に教えてもらいました。



▲昭和43年に東京で手踊りを披露した青年団の皆さん 写真提供：兼平好さん

青年団の時に踊りを教えて下さった方は、青竹勇さん（新畑）、笛は、神杉寧さん（横川）、歌、音頭（太鼓）が青竹郁太郎さん（新畑東）、兼俊久雄さん（兼俊勉さんのお父さん）（新畑西）で、手踊り保存会発足時は、踊りが青竹勇さん（新畑）、笛は、神杉寧さん（横川）、青竹郁太郎さん（新畑）などでしたが、保存会発足時には踊りを覚えていた方が少なくなり、山本定彦さんなど、青年団で踊りを習ったメンバーも地域の皆さんに踊りを教えています。山本定彦さんは、青竹郁太郎さんの息子さんです。地域で大切に受け継がれて来た、伝統ある手踊りを残し、次の世代へ受け継いでいこうという強い思いが、手踊り保存会発足へと繋がっていききました。」

発足から現在まで



▲保存会発足の昭和59年。三嶋神社で奉納された手踊り

上の写真は、保存会発足の昭和五十九年十一月十一日に開催された「ふるさとまつり」の際、三嶋神社で手踊りが奉納された時のものです。踊りの方、ご覧になっている方々の様子から、祭の賑やかな様子が伝わります。

このほかにも、発足の年には、前年から練習してきた大道理小学校の五、六年生二十六人が、「敬老会」で地域の七十人のお年寄りを招き、踊りを見てもらって大変喜ばれたことが、「広報とくやま」の記事に書かれており、地区をあげて伝統芸能を残していこうという熱気が伝わってきます。また発足の翌年、昭和六十年の手踊り保存会の活動について書かれた資料には、七月二十日の「市民ふれあいの集い」、八月十四日の「盆踊り大会」、九月二十九日の「運動会」、十月六日の「徳山市産業祭」、十一月十七日の「郷土芸能大会」と、手踊りを披露する日程が記されています。練習日程としては、四月から六月までの毎月第一と、第三木曜日となっていました。それから周南市になるまでの間、徳山市の市制施行五年毎に開かれる、「郷土芸能大会」への出場、「産業祭」・「のんたままつり」での演舞、現在もされている「運動会」、「盆踊り」などでの披露のため、手踊りは、地域の皆さんへと伝えられ、受け継がれてきました。

徳山市制施行60周年記念

第三回郷土伝統芸能大会

どこも 平成7年12月17日(日) 12時30分
徳山市文化会館大ホール 入場無料

▲平成7年に開かれた郷土伝統芸能大会チラシ



▲小学生に踊りを教える山本さん

山本並子さん…「私も元々子どもの頃から盆踊りが好きで、太鼓などの和の音が好きなのですが、子どもたちに教える中で、踊りが好きな子どもだと感じられる子がいいます。」

【のんた祭 (平成6年10月)】
▼手踊りで道引きをする鬼人の面
次世代へ踊りを伝承するための活動として、手踊り保存会の井上正幸さん、山本並子さんは、今年二〇一七年の七月、八月、九月、沼城小学校三年生に、踊りの指導に行かれました。
この授業の中では、大道理地区のほかに、大向地区の「式内踊り」、長穂地区の「念仏踊り」、中須地区の「杖踊り」、須々万地区では盆踊りという校区内全ての中から、それぞれの地域の伝統文化を地域の方が教え、地域の皆さんから、踊りを教わった児童は、参観日に保護者の前で踊りを披露することを目標として練習に励みました。
(今年十月十四日が参観日でした)

現在そしてこれからのこと

【のんた祭 (平成6年10月)】

▼手踊りで道引きをする鬼人の面



▲のんた祭出場時 集合写真

【市民ふれあいの集い (昭和59年7月21日)】



兼俊勉さん…「新畑出身ですが、手踊りを実際に見たのは、青年団の皆さんが東京で踊りを披露された時で、踊りを憶えたのは、保存会発足の時でした。父が手踊りで太鼓を叩いていたのですが、亡くなってしまい、早く教わっておけば良かったと思っていました。踊りを習う時には、出来るようになるまで、一生懸命憶えました。手踊りは口伝で伝わって来た踊りで、太鼓などの楽器も、耳でリズムを聞いて憶えます。譜面がないので、次に伝えるのも、人から人へといった形になるため、少しでも早く後継者を育て、後世へ残していくことがこれから大切だと感じています。」

小学校が休校になるまで、小学生へは、運動会で踊るのに合わせて、一学期の終わりと夏休みの登校日で一回ずつ教えていました。中学生へも、運動会を指して、教えていました。
私が手踊り保存会に入ったのは、平成六年の「のんた祭」への出場前に山本定彦さんと、坂口サキエさんに誘われたのがきっかけです。練習は週一回のペースでしてました。その頃はPTAの活動を始めた頃で、若妻会などには入っていませんでしたが、地域行事等にはあまり参加していませんでしたが、保存会で、地域の年代が上の方と触れ合えて楽しかったです。衣装を着けて踊ると、気持ちの面でも、伝統芸能の踊りを奉納している実感がわいてきます。中学生時代、のんた祭(産業祭)には、吹奏楽の演奏で、三年間出ていたので懐かしく、違う形でまた出場出来てうれしかったです。今は、沼城小学校の三年生に総合的学習で教えていますが、自分の郷土で長く受け継がれて来た伝統芸能に子ども時代に触れられる体験は、特別なことだと思えます。そのことを大人になってからも覚えていてほしいです。兼俊勉さんが、「(就職の面接など)大人になった時、一芸で使えるので、手踊りを覚えていて損はない」と言われた言葉が印象に残っています。今後、これから長く地域で継承してもらえるように、出来ることを見つけていきたいです。」



▲向道中学校 運動会で手踊りを踊っています



▲手踊り練習風景です

▼百歳体操の様子です

★サロン
日時…11月22日(水)10時30分～16時
★ミニサロン
日時…12月13日(水)13時30分～16時

場所…大道理夢求の里交流館 大会議室
対象者…男女年齢問わず、どなたでも歓迎
★ご希望の方は、送迎をいたします。

☆ 毎週水曜日午後一時半から、介護予防のための「百歳体操」をしています！
お気軽にご参加ください！

夢求の里交流館からのお知らせ

サロンのお知らせ

藤井寛寧さん (新畑東)

(三面に続く)

少し昔の手踊りの風景

八朔まつりで手踊りが奉納されていた頃

新畑、畑地区の手踊り



▲小学生に踊りを教える井上正幸さん

編集後記
朝夕の寒さが身にしみる晩秋となり、木々の彩も鮮やかになって、今年も段々と日数が残り少なくなってきました。朝夕の冷え込み、実家に置いておいた冬物の服を慌てて取りに帰った時、ふと開いた新聞に掲載されていた作文募集の広告が目にとまりました。自分にとってかけがえのない大切な風景、モノ、人など、未来に伝え、残したいものについて、「わたし遺産」と名付け、作品募集されていて、作品としては写真一枚と、そのことへの解説として四百字の説明文を添えるというものです。大道理とのご縁を頂き、「むくろじ」づくりを通して、これまで沢山の出会い、お話を伺ってき、「わたし遺産」は増え続けてきました。このテーマであれば、自分にとってのかけがえのない風景、未来に伝えたい「わたし遺産」がありすぎて、選びきれそうになくて困る、という悩みが出て来ます。この仕事をしていなければ出会うことのない方々の方々の大切な人生の物語に触れさせて頂くこと、そしてそれを誰かに向けて伝えていくということ、未来へと繋いでいくということ。むくろじづくりは毎回たくさんのお話、「わたし遺産」に出会う旅でした。今回のむくろじは、「手踊り保存会」の起源と現在、これからのこと、手踊りのルーツ、新畑、横川地区でのかつての八朔祭りの風景についての特集号です。二〇〇八年から三百年前から始まったとされ、歴史が長く、口伝で受け継がれた手踊りの起源について、語り継がれて来た言い伝えと、かつて、東京で手踊りを披露された青年団の方々、横川、新畑でのかつての手踊りの風景を目の当たりにされた方々、保存会の皆さん、保存会発足当時の資料、小学校、地域行事等の様子を年ごとに収めたアルバム等を頼りに原稿を作っていました。むくろじに原稿を最も難航した特集の一つとなりました。しかし、難航して、進んでは戻りを繰り返すことも、今までお話ししたことや、お話を伺った神杉英忠さんとお会い、お話を伺ったことが出来たことなど、ついでに手踊りの風景、ご家族のことなど楽しんでお話を伺いながら、当時の情景が浮かんで来て、大切な宝物をこうして受け取っているんだなあと実感しながら、とても暖かな気持ちになりました。皆さんからお預かりした宝物の一つ一つ、むくろじとして形にしてお伝えすることが出来ること、とても有難く、幸せなことだと感謝します。(山縣清子)

井上正幸さん…「大道理青年団に興味を持ち、高校卒業後、すぐに色々な集まりに参加させて頂きました。当時は、今ほど多くの娯楽も無く、地域の方々とのふれあいが楽しみの一つでした。
地域内に、古くから伝わる素晴らしい手踊りがあることを聞き、何とか後世に伝承できないかという思いが強くありました。その中で、同級生の山本(旧姓青竹)定彦さんとの思いが合い、新畑地区の古老の方々からの指導を受け、市主催の各種行事等に参加して、その成果を披露してきました。」

「手踊り」には九つの踊りがあると聞いておりましたが、残念ながら、半分ほどしか受け継ぐことができませんでした。長きに亘って伝承されて来たものの多くは、五穀豊穰、無病息災等、生活の中での身近な事柄への祈りが込められたものがその殆どで、そういった意味合いから見ても、子や孫たちに手踊りを受け渡していく責任を強く感じています。」

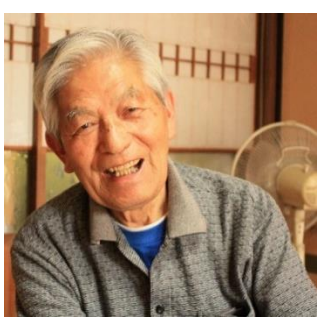
藤井寛寧さん…「昔(藤井さんの子ども時代、戦前)の八朔祭には、御田頭のお礼で、各部落から手踊りを三嶋神社に奉納してました。盆過ぎから練習を始めて、自分達でうちわなどの道具を作っていました。踊りの練習の時、踊りの輪では、お年寄りの間に

若い人が入り、真似ながら覚えていきました。当時、新畑の手踊りでは、音頭は、浜川亀楽さん、笛が山本八重子さんのお父さんの山本春雄さん、太鼓が兼俊久雄さんでした。手踊りの中でも「思案橋」は難しい踊りで、踊ることが出来ませんでした。八朔祭では、三嶋神社の下から、鬼人が道あけをして、「たるやっこ さかすきやっこ」などの奴(やつ)が樽、盃を持って踊りながら宮入りしてました。奴は子どもが踊っていました。

八朔祭の時には燈籠を作ってお供えしました。子どもの頃、踊りは毎年奉納できず、一年おきくらいの頻度で奉納していましたが、燈籠は毎年お供えしてました。燈籠は河内神社で紙を切ったり色を付けたりして皆で作っていました。お供えは新畑東、新畑西、畑でしてました。当時は、畑と新畑とで、五十軒くらい家があり、七、八十人くらいの大行列となつて三嶋神社に奉納に行っていました。

私が小学五年生の時、日中戦争が始まり、昭和十七年から二十年までの間、大道理を離れていたため、その間のことはわかりません。自分たちよりも少し上の世代の方たちが手踊りを盛んにされてました。戦後、物のない時代で、八朔祭での奉納はすぐにはできませんでしたが、盆踊りは戦後すぐ行われました。団扇の無い方は、扇子を持って手踊りを踊っていました。初盆を迎える家に行つて、手踊りを踊ったり、河内神社や西照寺での盆踊りでも踊ったりしてました。

横川の手踊り



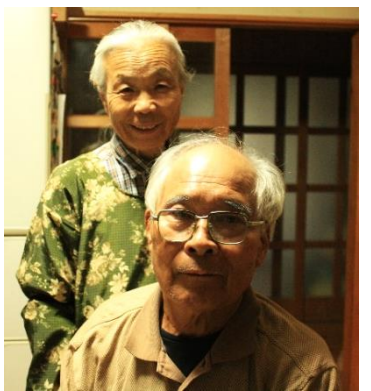
▲荒美誠さん (横川)

荒美誠さん「横川地区の八朔祭りは、夕方より、笛や太鼓の調べに合わせ、道行きの手踊りをしながら、西の井上さん宅前を通り、三嶋神社境内に入り、横川の手踊りを奉納してました。

手踊りは、十七、八歳の頃に荒美傳兵衛さんや復数のお年寄りから教わったように思います。子どもの頃は、地域のお年寄りから習うことが当たり前でした。横川の手踊りの音頭について、はっきりとは覚えてはいませんが、原浅衛門さん、原荒士さん、神杉寧さん等がされてました。

横川地区では、西照寺で踊りの練習をしたり、うちわを作ったりしてました。昭和三十年、私が二十四歳の時、徳山市に向道村が編入し、その記念で港まつり(産業祭の前身)で徳山に踊りに出ました。戦時中絶えていた手踊りは戦後、復活しました。昭和三十年代になり、それまでは、農業を専業としていた男性が外に勤めに出るようになり、部落での奉納はできなくなっていました。御田頭(ごんどんどう)は、神主さんを馬に乗せてご神幸をしてきた時期があり、その風景を今でも覚えてます。

祖父から孫へ受け継がれた笛



▲神杉英忠さん 敏子さん (横川)



▲神杉寧さんと文雄さん

神杉英忠さん 敏子さん「父(寧さん)は、手踊りで笛を吹いてました。父が盆踊りで吹くために取り出した笛を、小学生だった息子(文雄さん)が初めて吹いた時、音がきれいに出たことを父はとても喜んで、「こりや吹くよ」と、それまでは口伝で継承して来た手踊りの笛の楽譜を、息子のために書き起こしました。それを見て、息子がすぐに演奏が出来たのには、血筋だなと思って驚きました。父が譜面に起こした曲は、「道引き 宮入り つるんて くだき」

数え歌 つくはね 高い山 思案橋 傘ずくし」(寧さんが書き起こされた楽譜は左の写真)です。

踊りに使う笛は、節から節まで長い竹を使い、父が手作りしてました。父は、盆前になると、いつも笛を吹いてました。息子は父から笛を習い、手踊り保存会が発足した年の「市民ふれあいの集い」でも一緒に奉納しました。父は、保存会発足後しばらくして体調を崩したため、父と息子が一緒に奉納出来たのは、数回だけだったと思います。息子は高校卒業後に大道理から転出するまで、盆踊りの時など、手踊りを奉納する時、笛を吹きました。

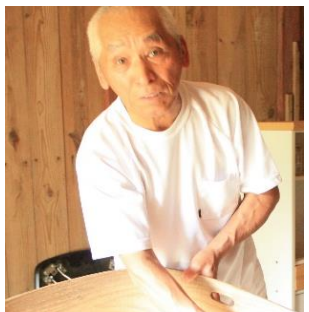
私(英忠さん)は歌を歌うのが好きで、手踊りでは、音頭を取る役割で歌を歌ってました。歌は踊りに参加する中で自然に覚えていきました。大道理全体での盆踊りになるまで、横川地区では、西照寺で盆踊りがあり、手踊りを踊ってました。老若男女問わず皆が集まり、とても賑やかでした。お年寄りの方は、身体全体をうまく使って、とても上手に踊られてました。



▲神杉寧さんが書き起こした笛の譜面と、寧さん、文雄さんが吹かれていた笛です

少し昔の大道理 秋の暮らし

栗山宣行さん (河内)



▲栗山宣行さん

栗山宣行さん「私は、八人兄弟の一番下です。男七人、女一人の兄弟で、一番上の兄とは十六歳の差があります。姉とも十四歳違いで、姉は私が中学生の時、お嫁に行き、お盆には実家に帰省してました。八人兄弟の中で唯一の女性で、※がりっぽう(※気が強いという意味だそう)でしたが、徳山の映画館に連れて行つてくれるなど、優しくしてくれてました。私は、中学卒業後に大道理から出て、二十年ばかり徳山に住み、再び大道理へ帰ってきました。家には、牛と馬と両方いて、馬は、山の木を伐り出したものを「地引」といって引く作業をしていました。牛は雌ばかりを二年飼ひ、共進会に出してました。牛のいる「だや」(牛舎)には、山の草を刈ったものを敷き、普段は、草を食べさせたり、稲刈りして脱穀した稲わらを積み上げた藁のうの藁を与えたりしてました。共進会の前には丸麦を食べさせてました。



▲藁のう (イメージ画像です)

農業のこと・養蚕について

家の裏にはかつて、共同の精米のための水車小屋があり、近所の家が交替で米をはがしてました。うちの家では、姉が本を読みながら、一日じゅう足で搗いて、米を剥がしてました。昭和初期には、蚕を飼う人が多く、私の家でも、母が嫁に来た当初は、養蚕をしていて、桑の木を植え、天井裏が蚕の部屋になっていて、はた織をしてました。今はありませんが、かつて家には、はた織機がありました。

私が中学生の頃までは、農作業は全て手作業で、稲刈りは、家族全員でしてました。田植は、大雨が降った時にも、蓑笠を着てしてました。当時は、収穫した稲の中で、良いものを種籾としてとっておき、田植の時期には、桶に三日位漬けて苗代をこしらえて、種を蒔いて育ったものを田んぼに植えてました。田植の時には、芯綱という、三角形で一センチくらいの道具を使ってました。遠くの田んぼに行くときは、朝八時くらいに家をでて、お弁当を持って行つて、家族で食べてました。夏場は、昼間は暑いので休み、夕方から夜にかけて作業していたので、夕食の時間は夜八時から九時くらいでした。

子ども時代の遊び



▲ホボラを編むための道具



▲手作りの道具です

近所に同級生はいませんでした。学校から帰ると、近所の子ども同士で遊んでました。男子は穴を掘って、ラムネの球を誰が早く埋めるかを競つたり、映画スターや野球選手の絵が描かれたメンコをしたり、釣りをしたりして遊びました。こどもの頃には川がきれいだったので、ウナギが沢山いて、ウナギを釣つたり、ツガニを獲つたり、ハヤを獲つたりしてました。

食事のこと、最近の暮らし

私の父は猟をしていたので、兎や山鳥などが獲れた時には、畑で採れたゴボウなどの根菜を入れて、母が炊き込みご飯を作ってくれてました。そういう食事のごちそうでした。母親の作ってくれた食事は、何でも味が良かったですが、酢の物が特に美味しかったです。普段の食事は茶粥と、ジャガイモなど根菜類の煮物などで、冬から春にかけては、麦ごはんを食べてました。麦は、牛や馬には、丸麦を煮たものを食べさせてました。人が人間用としては、麦をペしゃんこにへしやがして、柔らかくしたものを白米に混ぜて食べてました。一月末の大寒の時期は、朝から晩まで、寒餅を搗いてました。搗いた餅は、漬物桶に水を張って水餅にしてました。

中学生になると、給食がありました。向道地区は、徳山市の中でも、早い時期に学校給食が始まりました。学校には給食室があり、そこで、給食が作られてました。小学校時代には、脱脂粉乳が出て、とても飲みやすかったのですが、中学校の給食では、家で食べたことのないようなものも出され、特にカレーが美味しかったです。

定年退職してから現在までは、畑仕事などして毎日過ごしています。数年前から沢庵を漬けていて、最初は失敗しましたが、段々要領が分かつて来て、美味しく出来るようになりました。子どもの時以来、久しぶりに今年も、畑の傍にある茶の木が摘みをして、自分で炒って飲みました。昔から我が家にある、茶渋に染まった筵(むしろ)の上でもむと、とても良い香りがしました。毎日、農作業や家の事など、なにかしら仕事を見つけては、体を動かしています。